＜TSUBASA 参加企業の声（1）＞
ペルー ABACO への融資プログラムファンド

小松真実（ミュージックセキュリティーズ社長）

2010 年 10 月 19 日、米州開発銀行（IDB）の当時 Executive Vice President だった Julie Katzman さんが当社に来てくださった。今以上に小さな規模の会社にもかかわらず、今も変わらないオリジナルな金融スキームに興味を示してくださったからだ。その時から、当社と IDB との関わりが始まった。その 3 年後の 2013 年 10 月、私はメキシコのグアダラハラで、パネルディスカッションに参加することになった。IDB が毎年主催するイベント「FOROMIC」である。ここでは、東日本大震災で被災した企業向けのファイナンスとして、当社の金融スキームがいかに機能したのかを説明をさせていただいた。

FOROMIC でのパネルディスカッションの様子（執筆者提供）

そのラテンアメリカ訪問では、FOROMIC に参加させていただくだけではなく、ペルーの日系人による貯蓄信用組合である ABACO への訪問も実現した。当時若きリーダーで、現 CEO である島袋ヘルマンさん、IDB の成田さんと、ペルーの農村地域イカを訪問することもできた。多くの農家さんが、まだまだ手作業で畑を耕し、白インゲンやアスパラガスを育てている様子を視察できた。その村では、IDB が技術支援ということで、小さな農業協同組合を組織化し始めているという。その集落に、ポツンと古い YANMAR のトラクターが置いてあった。一人では買えないが、組合でなら買えるこのトラクターのおかげで、農業の効率が何倍にもなるという。IDB の支援で、生活が激変するという開発の真髄を見たような気がした。

イカの農村に置いてあったトラクター（執筆者撮影）

その小さな農協の会合に参加させていただき、幸運にも地元の手作り料理を振る舞っていただいた。これが、私にペルーで事業を行おうと決心させた料理。それぐらい心に響いた料理だ。

イカの農家さんに振る舞っていただいた手料理（執筆者撮影）

この料理、何しろ美味い。見た目は素朴、だが美味い。現地の皆様からのおもてなしを感じる、かけがえのない一品だった。

ABACO が、このような小さな農協向けの融資を、新たな事業として行うという。当時は、頼母子講がベースの信用組合なので、預金者以外への融資は基本的には実施していなかったが、これを機に農家支援の融資を行うという。その貸付の原資を調達するため、IDB から資本性ローンを、当社から日本の投資家からの出資を集めるという、垣根を超えた取り組みが始まった。多くの投資家の賛同を得て、日本にいる日本人の資金を、ABACO を通じて、ペルーの多くの農家さん

のお役に立てたと考えている。きっと、トラクターが導入され、手作業から機械作業へと変わり、生産性も上がって、生活が変わっていることだろう。

そんな経験を経て、ペルーへの思いは強くなり、ペルーに金融子会社を作り、ペルーの投資家がペルーの事業者へ投資する枠組みを作れないか、検討を開始した。そして2017年、JICAの「案件化調査」のプログラムに採択され、現地での法整備の状況、投資家や事業者のニーズの調査を行うことができた。そこで分かったのは、フィンテックに関する法改正が行われる予定であり、それが施行されれば十分に実現可能であることだ。

そして、TSUBASAである。ペルーの農村地域で、農家さんに振る舞っていただいた名も知らない料理を口にしてから、全てがつながっていて、ここに辿り着くことができた。そもそも、私たちがラテンアメリカで広げたい金融スキームとは何か。頼母子講のフィンテック、つまりは、テクノロジーを活用した相互扶助のファイナンスである。ラテンアメリカへ移民として渡った我が国の先人たちが、遠い国で力を合わせて助け合った金融スキームである頼母子講を、フィンテックとして昇華させたいのだ。スキームの詳細は、IDBのレポート「Empathy Driven Funding: New Frontier of Financing Small Businesses」[1]が詳しいのでこちらを参照されたい。ペルーにおいて、Micro Investment Crowdfunding事業について、法整備も進んできたこのタイミングで、TSUBASAのサポートを得て、ABACOとの合弁事業として新会社を設立できることになった。ペルーの志の高い事業家へ、ペルーの中高所得者層からの資金を供給できるようになる。もちろん、日本の投資家を集めることも可能だ。ABACOには資金ニーズのある事業家を発掘してもらい、当社はシステム開発を行い、頼母子講フィンテックのノウハウを提供して事業化していく。現地CEOを採用し、早々と進めていきたい。

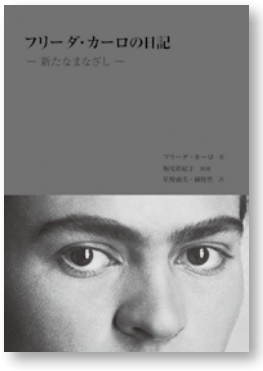
TSUBASAの素晴らしいサポートに感謝しつつ、採択いただいた企業として、あえて生の声をお届けしたい。資金的な助成は心からありがたい。ただ、公的な資金であるゆえ、マイルストーンをこなし、つど許可を経て、少額ずつ拠出ということで、せっかくまとまった額の助成金が採択されていたとしても、本来の力を発揮しにくい。お金はまとまった方が力強い。信頼関係が大切なので、これからも対話を続けていきたいと思う。

私が大事にしているのは、アミーゴ（Amigo）であること。その証として、日系コミュニティの宝、ペルー在住のシンガーソングライターKenji Igeiさんの音楽アルバムを、当社の音楽レーベルよりグローバルでリリースさせていただいた。アルバムの名前は『Uchinanchu Yaibin』。そのタイトル曲の歌詞が象徴的だ。「この旅のストーリー　受け継ぐこの魂が　心につながる　今　こう言えば　笑顔になれる　ワッタ　ウチナーンチュ　ヤイビン」。心に響く名曲であり、聴くたびにラテンアメリカでの事業化へ、決意を新たにするのである。

1 https://publications.iadb.org/en/empathy-driven-funding-new-frontier-financing-small-businesses

（こまつ まさみ　ミュージックセキュリティーズ株式会社
代表取締役社長）

ラテンアメリカ参考図書案内



『フリーダ・カーロの日記 ―新たなまなざし』

フリーダ・カーロ　堀尾 眞紀子解説、星野 由美・細野 豊訳　冨山房インターナショナル
2023年5月　294頁　8,000円＋税　ISBN978-4-86600-114-2

フリーダ・カーロ（1907～1954年）と言えば1925年にバス乗車中の事故で瀕死の重傷を負い生涯手術を繰り返し、22歳で壁画画家ディエゴ・リベラと結婚、ディエゴの不倫に悩まされながらも米国から来た美術家イサム・ノグチやスターリンとの政争に敗れメキシコに亡命してきたトロツキーと関係をもちながらディエゴを愛し続け画作に励んだ美貌の画家として知られる。本書はフリーダ自身の日記の全原文・原画とその訳を中心に、フリーダの芸術と生涯（解説者）、芸術作品としてのフリーダとその想像する芸術、文学として解読する日々（3人のメキシコ美術研究者）の解説を載せた豪華な画文集である。

〔桜井 敏浩〕